

幼児の自発的な歌についての一考察

—延長保育での遊び・生活に着目して—

A study on children spontaneous singing: In relation to play and activities during the period of extended daycare

山口恵美子（東京福祉大学短期大学部）

Emiko Yamaguchi (Tokyo University School of Social Welfare Junior College)

（要旨）

幼児における「豊かな表現」は、自らの素朴な表現の体験が重要であり、音楽以前の子どもの表現を大切にすることが重視されている。幼児の「豊かな感性や表現力」は、生活や遊びの中で自ら発する自由な音声や言葉での表現が受け入れられ、自己表現への意欲を高めることができる。こうした場における子どもの表出活動に着目して、保育園における子どもの行動観察により子ども独自の発声を捉える事は、幼児の表現活動の研究において重要である。

自発的な歌が発現するまでの様子の事例観察を実施し、表現活動を分析し、発現の状況や人との関わりを捉えることにより自発的な歌発現の持つ重要性を明らかにすることを目的とする。

本研究では、子どもの生活や遊びの場として保育園の延長保育時間帯において、本研究者および担当保育士が保育園児とかわる中で、園児たちが遊んでいるときの声を IC レコーダーに録音し、自発的な歌など音楽的に表出した部分についてコンピュータに取り込み、分析した結果、自発的な歌は、幼児にとってその時々や場面に応じて心地良く表現できる方法がとられており、その時々々のイメージに沿ったものであった。用いられる言葉は、幼児の言葉自体への興味、心情体験の表現であった。延長保育という場で観察したことにより、2 時間程の時間の中での動から静への展開があり、その中で園児たちが自身の内面を表出しやすくなる時間帯、場面が認められた。

現場の行動観察の記録から、幼児の自発的な歌が人間形成の伸長に有用であることが立証された。

（キーワード）

遊び、表現、歌、人との関わり、延長保育

1. はじめに

幼児期の教育は、子ども自身の生活を大事にすることが基本とされている。音楽的活動は、人間固有の根源的活動であり、民族文化の根幹をなしているともいえ、人格の基礎を養うとされる幼児期の音楽活動については、特に自分なりの仕方で表現しようとする意欲を養う事が重要であると考え。

保育所保育指針(2018)や幼稚園教育要領(2018)

においても、保育内容「表現」には「感じた事、考えたなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりする。自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう」という項目がある。さらに「子どもの自己表現は素朴な形で行われることが多いので、保育士等はそのような表現を受容し、子ども自身の

表現をしようとする意欲を受け止めて、子どもが生活の中で子どもらしい様々な表現を楽しむことができるようにすること」とされている。

一方、現代社会では多様な文化的刺激が子どもを取り巻いている。音楽的な環境について言えば、多様な音楽文化が取り入れられ発信されており、子どもたちはテレビなどの媒体による一般的な環境からの音楽、保護者が好んで聞く音楽、幼稚園保育所などの保育の場で、子ども向けに選択された音楽など、性質の異なる音楽に触れている。一方、子どもはその発達段階に応じて自然にリズム、音の高低、言葉をもって、自分の内側にある感情や思いを表出している。やがてそれらが、外部からの刺激への調整を経て、洗練され豊かな内容を持つようになるわけであるが、「豊かな感性や表現力」が育まれる素である。自ら発する自由な音声や言葉での表現が受け入れられ、自己表現への意欲を高めることがまず重要であろう。

しかし、保育現場では一般的に、音楽の領域の保育は保育者主導によって、望ましい音楽的表現の習得が目指されている事が多い。子ども自らの自由な表現が受容され、そこから発展されるよりも、まとまった音楽活動へと導かれていると言える。子どもが自らの感情や身体状況、気持ちを音声によって自由に表出、表現することはどこで出来るのであろうか。近年は何れの場合も大人中心の生活になり、子どもの生活リズムや子どものレベルに合わせた、ゆったりした時間や空間が矮小化している。こうした中では、子ども独自の音声的表現などは、着目、受容されにくく、子ども自身もそうした表現の心地よさを十分感じる体験を経ないで、既成の音楽活動に入っているといえよう。

幼児における「豊かな表現」は、自らの素朴な表現の体験が重要であり、音楽以前の子どもの表現を大切にすることが必要である、との視点で子どもの生活の場を捉えた時、そのような事が可能な場として、幼稚園や保育園の延長保育、預かり保育が考えられる。この時間は比較的、個々の子どもの生活リズムや遊

びに任される。一方で保育者の見守りがあるため、安定した居場所となり、子どもたちは安心して自分の気持ちを表出できる状態にあるといえる。

子どもたちが遊びの中で自然発生的に生じる歌は、研究者によって「つぶやき歌」(細田, 1998)、『つくり歌』坂井・五味(2003)などと名付けられている。

細田(1998)は、既成曲を歌うときと比べて「つぶやき歌」の発声は自然で柔らかく、独り言をつぶやいているかのように、静かで落ち着いた声でうたっている。身体やのどには無理な力が入っていないため、聞いていて気持ちのいい声である。全体的印象としては、自然で柔らかく、無理のない声でうたっている。うたっている子どもの様子からは、自分が安心できる環境におり、気持ちが安定していることが見てとれる。気持ちに合わせて僅かに、あるいは大きく体を揺らして拍子をとることが、うたっているときの気持ちを支えているようである」としている。

こうした場における子どもの表出活動に着目をして、保育園における子どもの行動観察により子ども独自の発声を捉える事は、幼児の表現活動の研究において重要であると考えられる。

2. 目的

保育園児の自発的な歌による事例観察を実施し、表現活動を分析し、発現の状況や人との関わりを捉えることにより自発的な歌発現の持つ重要性を明らかにする。

3. 方法

(1) 研究対象

A県B市の市立C保育園の延長保育園児、3歳児15名の中で自発的な歌を多く歌った4名(B子、D男、K男、N子)と4名に関わりがあった園児を対象とする。

(2) 研究の方法

201X年10月～翌年6月、C保育園にて本研究者が、週1回程度(おやつ時間を除き、16:00～18:00)

園児たちが遊んでいるときの声をICレコーダーに録音し、自発的な歌など音楽的に表出した部分についてコンピュータに取り込み、音楽的要素を分析し、研究者や友だちとの関わりを記録しておく。

観察を実施した保育園への配慮により年表記を伏す。

本研究および担当保育士が園児とかかわる中で、自発的な歌が発現するまでの様子を観察し記録する。

全く自然な状況で、自発的に歌われている歌の収録は、幼児が歌っているときに録音しようとする、声が小さくなったり、歌をやめてしまったりなど難しいと坂井・五味(2003)は述べている。

本研究では、保育所の許可を得て延長保育の約2時間、ICレコーダーを録音状態にして、子どもたちに気づかれないようにロッカーの上に置いた(外遊びの時は研究者のポケットの中に入れた)うえで、子どもたちの行動観察をし、自発的な歌を歌っている場、およびその前後の子どもの言動や状況を記録し分析することとした。このことにより、子どもたちは録音を意識することなく自然な状況で、遊びに専念することができる。

(3)使用機器

SONYのICレコーダー『ICD-SX734』を用いて延長保育時の音を録音した。

4. 結果と分析

(1) 自発的な歌の発現頻度

録音収集日数は開始日201X年10月10日～最終日の翌年6月27日の間の31日間で、録音収集数は合計99個であった。

なお、成長過程によって出現回数に差が出てくるのかを調べるために、前期を10月10日から12月19日、中期を1月9日から3月27日、後期を4月11日から6月27日として、各期における各園児の自発的な歌の発現回数を出生順に集計した(表1)。その結果、全体的な特徴的傾向はなく、発現回数の多かった4名についてみると、B子は、前・中期に比して後期の発現回数が多いが、D男とK男は前・後期が同

じ頻度で発現しており、N子は前期が最も多く、中期・後期と発現回数が減っている。

表1 自発的な歌の発現回数

名前	A子	B子	C男	D男	E子	F男	G子	H男	I子	J子	K男	L男	M子	N子	O男	回数
前期	2	3	0	7	0	2	3	0	0	7	1	1	9	35		
中期	1	1	0	1	1	2	2	3	2	2	1	2	6	24		
後期	0	13	0	7	0	1	1	4	0	7	2	0	3	2	40	
総合集計	3	17	0	15	1	5	6	7	0	2	16	4	3	18	2	99

(2) 自発的な歌の1日の平均発現回数

研究データとして次の基準によって採用した。

調査期間全体で自発的な歌発現の回数が多かったB子、D男、K男、N子の4名(表2)(図1)の自発的な歌について、出生順に分析を進めていくこととした。

表2 延長保育の利用回数と自発的な歌の回数

名前	B子	D男	K男	N子
自発的な歌の回数	17	15	16	18
延長保育の利用回数	27	18	30	28

子どもたちの延長保育の利用回数は異なっている。

(回)

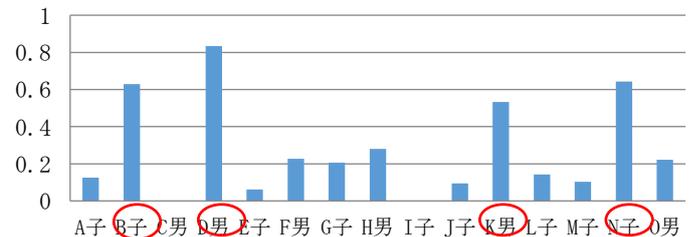


図1 自発的な歌の1日の平均発現回数(出生順)

(3) 自発的な歌を歌い始めるまでの時間と歌の長さ

4名の調査対象園児が延長保育開始時刻から自発的な歌を歌い始めるまでの時間とその時の自発的な歌の長さを図2から図5に示した。

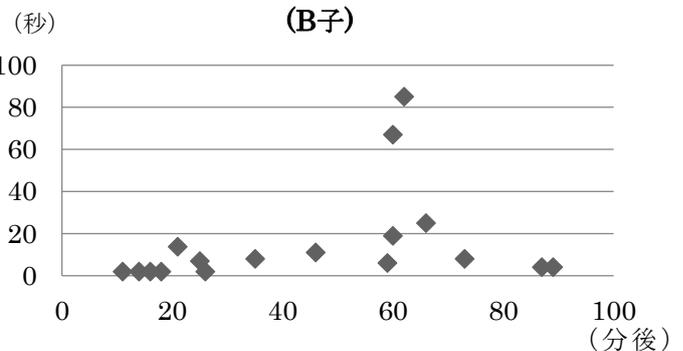


図2 B子の歌い始めるまでの時間と長さ

B子は、1回20秒以内の短い歌が延長保育開始後比較的散らばって発現している。60秒以上およそ80秒以上の歌が開始60分あたりに発現している。

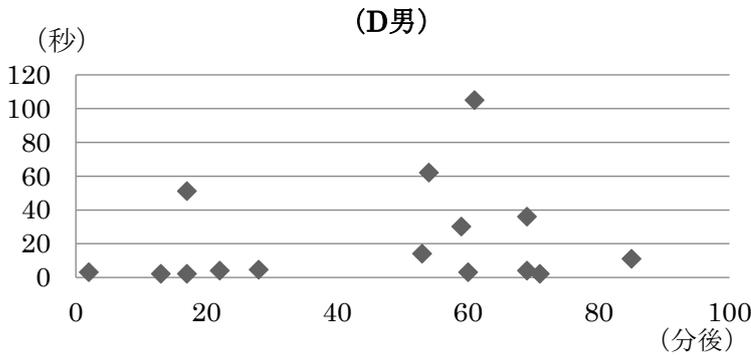


図3 D男の歌い始めるまでの時間と長さ

D男は延長保育開始後30分くらいまでは、比較的短い歌が発現しているが、1回だけ20分経過後50秒くらいの歌が発現し、その後50分過ぎから70分くらいにかけてよく発現しており、100秒以上の歌も見られる。

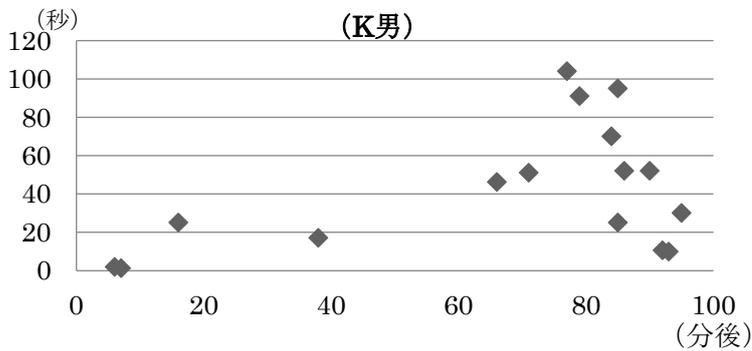


図4 K男の歌い始めるまでの時間と長さ

K男は80分くらいから100分にかけて彼の歌の3分の2くらいが発現している。前半は、あまり発現していない。

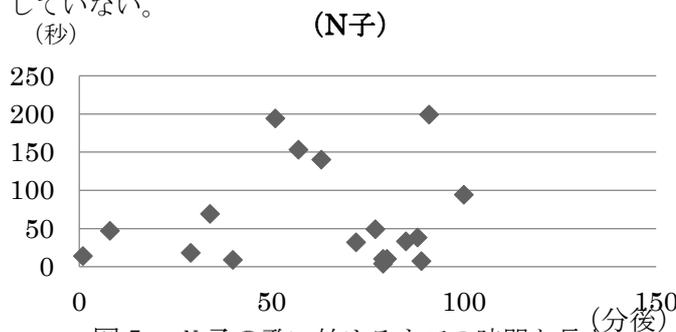


図5 N子の歌い始めるまでの時間と長さ

N子は、他の園児に比して長い歌が多く、3分を超えるものもある。

自発的な歌の発現時間帯は、4名とも延長保育の後半に盛んになることが認められた。長い時間の歌は、4名とも後半に集中している。このことは、戸外で活発に体を動かして遊んだ後室内に入り動から静への切り替えになる事が自発的な歌の発現に関係していることが考えられる。そして、その時に生活や遊びの変化が自発的な歌を発現し易い環境であり、自分の気持ちを『歌う』ことが自然発生すると推察する。そのような動から静へのホッと安定できる環境を構築することが大切になると考えられる。

細田(1998)は、子どもがつぶやき歌を歌い出す状況は、子どもの環境や心の状態、気持ちの高まり等が複合的に作り出していると述べている。

一方湊田(2015)は、自分が歌いたい時に気ままに歌う場合や自分が作った歌を歌う時には、本人の「内からの働きかけ」によってうたわれるとし、ひとりで何かをしている時につぶやき歌を歌っていることが多くあったと述べている。また、人と関わりをもつ中で発生したつぶやき歌は、人と一緒におどけたり、ふざけたり、人に限らず何か心に心がうかれたりできる環境を用意しておくことも「音楽的表現」を育てる環境として大切であるとしている。

(4) 自発的な歌発現の状況と人との関わり

①B子の例 10月10日

場所は、園庭のベンチ。

時間は、延長保育開始21分後に14秒間。

A子、B子、G子、H男、J子、M子、N子たちがいる。

ベンチに腰掛けた研究者の膝の上に一人ずつ座り、交代しながら遊園地の乗り物ごっこをした。自分に都合のいい順番の主張になったため、ベンチの前に1人ずつ入れる円を園庭に並べて描いた。子どもたちは、それぞれの円の中に入り順番待ちをした。そして自分の番になると研究者の膝に腰掛け10円を入れ(真似)、好きなアトラクションをリクエストする。アトラクションは、ロケット、滑り台、落とし

穴の3種類から選択できるようにした。

表3 B子の例 10月10日

A子	「Aちゃん」
	3種類以外のリクエストをした。
研究者	「Aちゃん、Aちゃん、かわいいAちゃん」 歌った。
N子	「次はB子ちゃんの好きなトムとジェリー」
年中男児	通りがかりに履いていた靴を見せに来た。
研究者	「あっ、かっこいいね」
年中男児	「これねー赤色の」「赤色の車」
研究者	「きれいな色だね」
B子	「先生、Bちゃんの一とろがね」
研究者	「る一とろ？る一とろっていうの？」
B子	「じゃーっち」
研究者	「じゃーっち？」
B子	「じゃーっちの一とろ」
研究者	「じゃーっちの一とろってどういうのかなあ」
B子	歌始める。《リュウトロ リュウトロ かわいい こ かわいい きょうもおとこと おんなのこ みつ けたー またでた きょうも しごと がんばりまー す リュウトロ》
研究者	「上手だねえ」 「は、どうもありがとう」 「る一とろっていうお歌があるんだね」
B子	嬉しそうにキャキャキャと笑う。 嬉しそうにエ〜と笑う。

始めのうちは3種類から選択して乗り物ごっこをしていたが、A子が考えたものをリクエストし、それを研究者に歌ってもらうという事例を見たB子は、リクエストすることができることを知り興味が湧き、自分もやってみたいという気持ちからB子もリクエストしたと考えられる。しかし、B子のいう「る一とろ」について研究者は把握しておらず、B子に尋ねたものの今度は「じゃーっち」という返答であったため、聞き返すことになった。B子は「じゃーっちの一とろ」と組み合わせた返答で、どのようなものなのかを再び尋ねた。B子のリクエストについてこちら側がすぐに理解できていたら研究者が歌っていたはずであろう。しかし、B子のいう単語の意味も不明であったので「どういうのかなあ」とB子に尋ねたことが自発的な歌とし発現したと推測される。

②D男の例 5月9日

場所は、保育室の机。

時間は、延長保育開始2分後に3秒間。

延長保育開始直後、挨拶と出席をとるため席に着

こうとしている時である。D男とA子、B子、C男、E子、F男、G子、H男、J子、K男、L子、M子、N子、O男たちの14名がいる。席は決まってはいるものの、延長保育時では自由席としている。既に半数の園児が着席しており、研究者は空いていたD男の向かいの席に座った。

表4 D男の例 5月9日

D男	「えみちゃん」
B子	「Bちゃんのえみちゃんだよ」
L子	「ちがう」
	B子とL子が実践者の膝の上に座りにきた。
D男	「ぼく、まーえのここ」 「ハンガーハンガー」
A子	「えっ」
N子	「NちゃんNちゃん」 「ここだめ」
	この場所に座っていいかを確認した。
B子	「早く早く」 椅子を移動させながら研究者の隣に割り込もうとした。
A子	「ねえ先生、Gちゃん」
	G子が座る席がみつけれないでいることを研究者に知らせた。
研究者	「Gちゃん、ここすわればいいじゃん」 空いている横の側面の所に誘った。
F男	「まてー」B子の後を追った。
D男	「叩いたらだめだよ」
B子	「いやー」と叫んだ。
	G子を見て「キヤー」「アー」
D男	「うるさーい」
G子	座るのを躊躇していた。
B子	「キー」と叫んだ。
D男	「うるさーい」「F男と一緒にさ、ここ」 F男を隣に呼んだ。
	「チーン、ガシヤッ、開いた」
L子	「ねえねえ」
B子	「キー」と叫んだ。
D男	歌い始める。《バカやろうーん》

D男は、B子とF男がお互いに割り込みを巡って先を争う中、手が出た事を自分の席の正面で目の当たりにしたため注意を促したと思われる。B子の叫び声に対して「うるさーい」と2度言ったものの効果がなく叫び声が続き、苛立たしい思いが推測される。本来なら「バカ」と言いたかったのではないかと推測される。しかし、それを言ってしまうと益々B子がエスカレートしてしまうと瞬時に思ったのではないかと推測される。

このように場を読み取る力が出てきたため人間関係を温和に保とうとすることが自発的な歌となって自然と表出したと推測される。

そして自発的な歌は、自分自身への内面のストレス緩和になっていると推測される。黙ったままではなく感情を歌にして表出することにより自身が現状を認め、納得するなど気持の安定が図られているのではないだろうか。このようなことに対し、大人はもっと目を向け、意識して園児たちと関わっていく事が幼児を理解する上で重要となってくると考える。

時には本来ならば怒るところを、メロディーに乗せ自発的な歌にすることで他者へストレートに怒りをぶつけることを回避している。結果、その場の雰囲気や人を壊さずに人間関係を保安しようとする行動につながったと考えられる。

③K男の例 3月27日

場所は、保育室ロッカーの前。

時間は、延長保育開始6分後に2秒間。7分後に2秒間。

B子、F男、K男、L子、M子、N子たちがいる。

ロッカーの前で椅子に座った研究者の膝の上に子どもたちが座って10円玉を入れる真似をし、遊園地の乗り物に見立て、B子、L子、M子、N子たちと一緒に乗り物ごっこを始めた。その手前に椅子を並べ順番を待つ席を用意した。そこへP子が遅れて延長保育士と一緒に入室した。当日のみ急遽延長保育をすることになったという連絡を受けている時にK男、F男が乗り物ごっこに加わってきた。F男が割り込んだため、N子が大泣きになりそしてF男も「自分が先」を主張し泣き出した。研究者がF男にN子の気持ちを伝え研究者が仲立ちとなり対応をしていた。

表4 K男の例 3月27日

K男は、F男と一緒に来たが、割り込むことなくN子、F男の様子を遠目に見ていた。
 研究者 「押さないでね、F男くん。押して痛かったんだって。えい、えいってやって痛かったって」「早くしたいのは分かるけど、手は出したらいけないね」
 「L子ちゃんの次」「何に乗るの、次は」
 B子 「オチンチン」
 研究者 「やだそんなん」
 N子が先頭に並ぼうとした。
 研究者 「あっ、N子ちゃん。M子ちゃんが来た後でN子ちゃんが来たよ。その後で二人が」
 B子 「おならがいい、おなら」
 研究者 「いやーん、もうちょっといいやつにしてー」

B子 「おならがいい」
 研究者 「いやー」
 「何にしますか」
 B子 「じゃあとろろろ」
 研究者 「M子ちゃん、次の人ここに座って。ここに座ってたら乗れるよ」
 順番が先のB子の後にM子が椅子に座った。
 K男 歌い始める。(6分後に2秒間)
 《タンタンうさぎ》
 「あじゃらして、あつたんたんで、おーどろ」
 ふらふらと手足を動かす。
 B子 「タンタタターララー、きってらー、いなくなーのはこしゅいん」と歌った。
 K男 歌い始める。(7分後に2秒間)
 《ラララー》

F男と一緒に乗り物ごっこに加わったとたん突然F男が割り込んだことは、K男にとっては予想外のことだと思われる。K男にしてみたら普通に乗り物ごっこに参加したつもりがF男の割り込みによってN子が大泣きになり、それに加えてF男までも泣きながら主張し、修羅場となった中で板ばさみになり大きな驚きと困惑であったと推測される。普段から争いごとの場面にはほとんど遭遇しないK男にしてみたらその様な場面を目の当たりにし、その場から遠ざかりたいという気持ちが湧いたのではないか。実際にはその場からは離れてはいないが、心がK男自身の中に閉じこもり、何か楽しい事を空想するという防御思考がはたらいたのではないか。うさぎというK男にとって安心するものが心に現れ自発的な歌となり、さらに「あじゃらして、あつたんたんで、おーどろ」と喋りながら踊ることでうさぎの世界に浸り、自然と困惑回避に繋がったと思われる。尚、このこともメロディーはついていないが自発的な歌に近いと考えられる。

④N子の例 3月27日

場所は、保育室ロッカーの前。

時間は、延長保育開始3分後に47秒間。

B子、F男、K男、L子、M子、たちがいる。

ロッカーの前で椅子に座った研究者の膝の上に子どもたちが順番に座り、10円玉を入れる真似をし、遊園地の乗り物に見立て、B子、K男、L子、M子たちと一緒に乗り物ごっこを始めた。その手前に椅子を並べ順番を待つ席を用意した。そこへP子が遅れて延長保育士と一緒に入室した。当日のみ急遽延長

保育をすることになったという連絡を受けている時にF男が乗り物ごっこに加わってきた。

表5 N子の例 3月27日

F男	「ねえぼくも入りたい 割り込んだ状況になった。」
B子	「ギャー」
	叫び声をあげF男と押し合いになった。
研究者	「つぶれちゃうねー」
F男	「ねえ、ぼくもー」
研究者	「で、誰だったっけ」「次の方ここ」 並び順が分かるように示した。
F男	N子を押した。
N子	「やだ、やめて」「あーん」 泣き出した。
研究者	「あっ、F男くんが押してN子ちゃん泣かしちゃった」
F男	「僕が先だったもん」
研究者	「いやー違う違う。見てた見てた」
F男	泣きながら 「僕が先」「僕が先」「僕が先」「僕が先だったもん」「僕が先」
研究者	「と、思うでしょう」「と思っちゃうけど、実はN子ちゃんがいたんだよね」
F男	「ぼくもやりたかったー」「僕が先だったー」
研究者	「先がいいんだよね」
F男	「ねえ、僕が先だったー」
研究者	「N子ちゃんがここにいたんだよ」 N子が前にいたことを示した。
N子	「何でー」
研究者	「先だったもんね、N子ちゃんね」 「F男くんも先だったもんね」 N子とF男が泣きやみ、椅子に座った。
研究者	「F男くんとN子ちゃん一緒」 「一緒にしましょう」 椅子を横に2つ並べた。 「押さないでね、F男くん。押して痛かったんだって。えい、えいってやって痛かったって」「早くしたいのは分かるけど、手は出したらいけないね」
	順番が先のB子の次にM子が、車のリクエストで乗り物ごっこをした。 「ここでさっきもめたF男くんとN子ちゃんなんだな」「一緒にどうぞ。はい、10円ずつ入れて下さい」 N子とF男は、隣同士で実践者の膝の上に座り、お金を入れる真似をする。
F男	「ぼくロケット」
研究者	「ロケットはダブルロケットですか」
N子	「Nちゃんは歌の、えっと、あの一、えっと、かわいい」
研究者	「かわいい歌ね」「N子ちゃんの歌が終わったらロケット発射することにします。どうぞ」
N子	歌い始める。
	《し っかり ないね いとぜい むりや りや いーくで の一すの この い きま》

列に並んでいたN子は、F男に突然押されて泣いてしまった上、「僕が先」を主張され困惑したと思われる。しかし、N子が前にいたことを代弁してもらったことで落ち着きを取り戻したようだ。また、F男も

冷静さを取り戻したことで、場が和んだと考えられる。そして2人同時に行うことは初めての試みであり、N子たちにとっては新鮮でわくわくする気持ちが湧き、自発的な歌として楽しみながら発現したと推測される。

5. 考察とまとめ

自発的な歌は、幼児にとってその時々や場面に応じて心地良く表現できる方法がとられており、その時々イメージに沿ったものであった。

東京都・北区保育実践研究グループ「つみ木の会」著(2014)において次のような状況が報告されている。自発的な歌とは、保育士に促されてではなく、子ども自らが歌いだすということとして、それは子どもの心情表現であるとみている。その具体例として、「あそびながら小さい声で擬音語を発したり歌を歌ったりしていた」「歌にすることで物やあそびのイメージが広がったり、さらに楽しくなったりする」、「身のまわりのものや出来事」、「自分の思いなどを、知らず知らずのうちにリズムや歌で表現していた」と述べ、その中の中心的要素として、『あそびながら』、『小さい声で』、『擬音語を発する』、『イメージが広がったり』、『さらに楽しく』が挙げられている。

用いられる言葉は、幼児の言葉自体への興味、心情体験の表現であった。言葉の内容には、言語的意味のある発声と意味の読み取れない発声とがあり、その時の気分の変化によって言葉の内容や長さが大きく変動すると思われる。単語としては意味を持つが、文として繋げると一貫性がなく意味が不明になるのは、園児がその瞬間の気持を表出し、音として表現するだけのためであると考えられる。

今川(2005)は、「人とのかかわり」を通して感情の動きが引き起こされることと、多様な声による表現とは、密接に関連している。と述べている。

保育者は、園児一人ひとりの行動や言葉の理解と、そこから発信される個々の思いを察知し汲み取っていくことが重要であると考えられる。そのために常に

個々の園児に対し興味をもって関心を示していくことが大切である。それによって園児は、自信をもち安心して自身の内面を表出することができる。このことが、園児との信頼関係の構築と、より良い人間関係の形成に、大きな役割を果たし、園児たちへの社会性の発達を助長していくと考える。

本研究は、延長保育という場で観察したことにより、2時間程の時間の中での動から静への展開があり、その中で園児たちが自身の内面を表出しやすくなる時間帯、場面が認められた。このように個々がホッと一息ついて安心して自身の内面を引き出せる環境整備を意識して行っていくことも大切であると考えられる。

そして、観察記録より、幼児が自発的な歌を発現することが、気持ちの解放や気分の安定、人との関わりなど、穏やかな自己表現を導き、人間形成の伸長に有用であることが認められる。自発的な歌を大人が共感することが分かるとさらに喜んで歌の充実につながるとともに自己を表現する自信につながっていると考えられる。

そして、個々の感情や周りの状況が大きく反映されていることが分かった。また、自身の思いを表す手段が単なる言葉ではなくメロディーを伴った歌になるという表現は、常にその時々感情と一体化していることが考えられる。

観察記録から、自発的な歌が出現した際、幼児が表現した背景や状況を以下にまとめる。

- ・興味があり、自身が持っているイメージを楽しみながら、友だちから優しい言葉をかけてもらい機嫌がよくなった。
- ・順番待ちをしなければならないことは理解したが、すぐには出来ない現実があり仕方がないと受け入れたものの気持ちは収まらないという葛藤がある。
- ・すぐにやってみたいができないもどかしさ、他児のする事を見て、自分もしたつもりになった。
- ・他児に対して伝えたものの効果がなく叫び声が続いたための苛立たいしい思い。
- ・瞬時に思い和らいだ時。

・ブロックを組み合わせていることから「合体」と戦隊ヒーローのイメージがわく。

・困った時に楽しい事を空想するという防御思考や不安な時に自身を安心させたかった。

・軽快に歌い始め自身のもつイメージの変化が本人の世界観の中で創作物語を楽しむ。

・新鮮でわくわくする気持ちなど

歌となって多くの思いが表現されていることが認められた。

自発的な歌に興味をもって聴いてくれる他者がいることで、子ども同士や保育者とのコミュニケーションがさらに広げられている。自身の歌を楽しむとともに他者が一緒になって聴いてくれる、あるいは一緒にリズムに合わせて身体表現をしてくれるなど楽しさを共有することにより、より一層楽しむとともに自己を表現する一つ的手段となっていると考えられる。

付記

本論文は、平成29年度東京福祉大学大学院社会福祉学研究科児童学専攻に提出した修士論文の一部を加筆訂正したものです。ご指導ご助言を賜りました先生方に深く感謝申し上げます。また、本調査にご協力くださいました保育園の先生方、園児の皆様には厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 淵田陽子 (2015) 2歳児がつぶやき歌を歌う時 大阪キリスト教学院大阪短期大学 紀要第55集 96-106
- 細田淳子 (1998) 音楽表現の原点としてのつぶやき歌 日本保育学会発表論文 36(1) 12-19
- 細田淳子 (2001) ことばの獲得初期における音楽表現—子どもがうたい始めるとき— 東京家政大学研究紀要第41集 (1) 107-113
- 今川恭子 (2005) 幼児の音声表現の発達を支えるもの：多様な声を使うこととその背景 立教女学院短期大学紀要 37巻 87-97
- 厚生労働省 (2018) 保育所保育指針解説 272-279
- 坂井康子 (2003) 子どもの発話の韻律とつくりうたの旋律 神戸

大学発達科学部研究紀要論文 11 (1) : 179

坂井康子、五味克久 (2003) 子どもの歌唱に関する研究について :

幼児の「つくりうた」の分析に基づく提言 神戸大学発達科学
部研究紀要論文 10 (2) 327-336

東京都・北区保育実践研究グループ「つみ木の会」 (2014) 二歳

児の自発的な歌からの気づき 社会福祉法人 全国社会福祉
協議会 保育の友 : 12-13

山口恵美子 (2019) 表現としての「つぶやき歌」の一研

究～3歳児の延長保育での遊びを通して～

幼稚園教育要領 (2018) 幼稚園教育要領解説 223-235